

# 肩書きじゃなく、情熱と理念

## 司馬遼太郎著「龍馬がゆく」の龍馬の生き方に共感

長谷部晃さんは、2011年から伊那市長谷で、古民家を使って、ジビエでおもてなしをする宿「ざんざ亭」の宿主。



たくまし腕から、やさしい味が生まれる

今、伊那谷の野生鹿の被害は甚大で、害獣として駆除され、破棄されている。その命を無駄にせず、おいしく食べやすいジビエは、猟師として、鹿の生態を知りつくした長谷部さんだからこそできる。伊那市駅近くにお店があった時、鹿肉の燻製を頂いた。季節や性別・年齢によって肉質や味が異なり、肉の下準備や料理を工夫するとお聞きしたことがある。森を知り、動物の生態を知り、その命を最期まで敬う。だからその料理はおいしい。姿は料理人というより、山仕事を生業にして、しかも、研究者のような佇まいがあった。

学生時代からの愛読書は司馬遼太郎の『龍馬がゆく』。幕末、自由な発想の龍馬は、多くの人と出会い、成長し、仕事を成した。いま、長谷部さんのまなざしは何に向っているのだろうか。ぜひ、長谷部さんのメッセージをご一読ください。ひたむきに、大きなうねりを起こしそうな野心も感じられる。